

教育現場のタブーを打ち破るために

峯岸 昌弘

2025.2.9

●森永卓郎さんの遺言

ぼくが大好きだった、経済アナリスト森永卓郎さんが、先日亡くなりました。ぼくが教師になってすぐのこと、働き始めたことをきっかけに見始めた番組に、TBSの『がちりマンデー』があります。森永さんがレギュラー出演されていて、そのコメントが大好きでした。「新しいビジネスの発想」というものは本当にすばらしく、これまでの常識に縛られず、考え方を柔軟にさせてくれるので、その発想をずっと学び続けてきました。ぼくの勤務歴と同じ20年以上に渡り、ずっと見続けてきた番組です。森永さんの気さくさは番組からも伝わってきていて、なんだか仲間のように思っていたので、亡くなってしまったことは非常に悲しかったのですが、最近になって、ある友人から『書いてはいけない』という森永さんの本を紹介されました。森永さんとは、毎週番組でお会いしている長い付き合いでしたが、これまで出されている本は読んだことがありませんでした。



興味がわいてきて、すぐ買って読んでみたのですが、ぼくの想像をはるかにこえて、その内容に衝撃を受けました。簡単に紹介すると、業界に存在する3つのタブーについて書かれているものです。つまり、「書いてしまうと大手業界からは干される」という内容なのです。その3つというのが、①ジャニーズ事務所の性加害問題、②財務省の異常な緊縮政策の正体、③日航機墜落事故の真相、です。「ずっとタブーとされていた①がついに崩れたのだから、いつか、あとの2つも崩れてほしい」という森永さんの願いが込められているものでした。タブーになっていく仕組みも赤裸々に書かれていて、読んでみて、たしかに業界で生き残っていくためには「口を閉ざす」ことが、賢い選択になっていくな、と思いました。

しかし、一方で、その隠された真相についてきちんと調べ、おかしいことをおかしいと発言し、干されようがなんだろうが、真実だと考えることを「本にして残す」という取り組みをしている人たちがいることを知り、素晴らしいと思いました。コペルニクスが真実だと考えた「地動説」を死ぬ前に本として残し、ガリレオが、宗教裁判にかけられながらも、それを証明していったように、その思いは引き継がれ、明らかにしていかなければならないものだと思います。(最近、NHKアニメの『チ。』も感動的に見えています^^)

●「日航機墜落事故の疑惑」について思うこと

特に③の日航機墜落事故の疑惑については、その「内容」に対しても、もちろん衝撃を受けたのですが、それだけではなく、これまでも、それについて書かれている本がかなりたくさん出版されていたのに、そのことをぼくが「まったく知らなかった」ということにショックを受けました。こんな重大な問題が、もしも真実なのだとしたら、それを知らなかったなんて、悔しいというか、亡くなっていった人たちに申し訳ない気持ちでいっぱ

いです。(ちなみに、みなさんの中には「日航機墜落事故の疑惑」と聞いて、「ああ、あのことか」と思える人は何人くらいいるのでしょうか。知っている人は、「ジャニー喜多川の疑惑」と聞いてすぐにピンとくると同じくらい、知っている人は知っている、という内容です。)

森永さんの『書いてはいけない』は、昨年出版されたばかりですが、2024年の8月の時点ですでに、26万部以上売れているとのことでした。だとしたら、もしかするとその影響が少しは大手メディアにも現れるかなと期待して、ぼくの友人は、事故のあった8月12日と、その翌日の新聞を図書館に行って全部調べたそうです。しかし、追悼関連記事はあっても、森永さんが問題提起したことに関連しそうな話題は「何一つなかった」ということです。「大手メディアでは、そのことに触れることがタブーになっている」と森永さんが指摘したことはやはり本当なのだ、とあらためて痛感したそうです。そして、出版物がそれなりに出ていたり、インターネット上ではいろんな情報が出ていても、大手メディアがそのことに一切触れないと、まるで「なかったことのようにになってしまう」という構造があるのだ、と改めて思いました。この情けない世界で、ぼくらができることなどんなことなのでしょう。

●教育の世界でも

教育現場でも、似たような構造が存在します。教科書で教える内容をみても、それを教えていく指導法をみても、本当に子どもたちの創造性を育てたいと思っている内容とは、到底思えません。それなのに、教科書以外の「たのしい授業」をぼくがやっていると、「どうして教科書にないようなことをやるんだ」と、必ず管理職からの指導が入ります。子どもたちのために自分が選んだ授業ができず、画一化されたつまらない授業を行うことがよしとされる管理下の元、いま、教師は「やりがい」という一番大事なものを奪われています。それに個人的に「もの申そう」としようものなら、正義感を掲げて、平気でつぶしにくるような管理職や教育委員会です。いや、そこまでいく前に、「そういうものだろう」とか「無難にやっていたら給料がもらえるんだから」といって、疑問をもたない教師の方が多数派で、その苦しさの正体に自分で気づくこともできずにいる問題が、大きいことのように感じています。

そんな、学校にある変な常識や、めんどくさいから言わないに限る「タブー」を打ち破るには、職場に1人でいてはダメなのです。いくら、自分自身で強く意義を感じ、そう思おうとしても、学校現場の中にいると、簡単に「やっぱり違うかも?」と、自信をなくしてしまうことがよくあります。それは、ぼくらが圧倒的な少数派だからです。正しいことなのに広まらないのは、間違っているからだと思ってしまうかもしれませんが、そうではありません。本来は素晴らしいことであっても、管理しにくいものであったり、コンプライアンスを異常に警戒してしまっていたり、いまの現場の常識に合わないものだったりしたら、広がるのに時間がかかるのです。それは、コペルニクスやガリレオが、真理である「地動説」をとんでもなく、それが認識されるまでに、とてつもない時間を要したのと同じことだと思っています。「100年先の教育」を見越した「たのしい授業」の研究。それらをきちんと評価し合える仲間が絶対的に必要になります。いま、こうして集まっていることが、それらの常識を打ち破っていく原動力になるでしょう。今日はそんな意義を感じながら、お互いに学び合えたらいいなあと思っています。